不定期刊行　　第540号　2015.03.18

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
大町高等学校

広島県の西部先生から「インターハイの山でバックカントリー」という話題をいただいた。一部リライトしながら、紹介させていただくことにする。インターハイのことを思いながらお読みいただければ、関係の方には楽しいと思う。（大西　記）

滋賀県山スキー旅の思い出①　安芸高校　西部伸也先生寄稿

2015.3.11（東日本大震災4年目の日に）　広島県　西部伸也

最初にお断りしておくが、「滋賀県」であって、「志賀高原」ではない。比良山系の武奈ヶ岳こそ1200mを超える標高ではあるが、1000mに満たない山が続く、高島トレイル。そんな山並みではたしてバックカントリースキー（山スキー）が十分楽しめるのかなとも思っていたが、書籍にコース紹介がないわけでもない。（白山書房『改訂山スキールート図集２』1984年）

「インターハイの山でバックカントリー」というのが、近年私の登山の一つのテーマでもある。全国に無数といえるほどあるバックカントリーフィールドの中から訪ねてみようと思う山を選ぶとき、一つのきっかけがインターハイの会場地に選ばれることだ。各県で選ばれる山にはそれなりにいい山が多いし、また夏とは違った姿を積雪期に見ることもできる。さらには、インターハイの山を肴に、全国の知り合いたちと一緒に登山ができれば、それもまた楽しい。「インターハイの山でバックカントリー」のきっかけになったのは、2011年の青森大会・八甲田山だ。その大会に広島県の総監督として参加していた私は、3 日目の総監督隊宿舎になっていた八甲田リゾートホテルに置かれていた『八甲田スキーツアールート図』に魅せられた。ロープウェイを利用して酢ヶ湯温泉まで滑走する「宮様コース」をはじめ、様々なコースが紹介されていた。名には聞いていたが、ぜひ一度積雪期にも訪れたいものだと思った。

その年3年担任であった私は、3月1日に卒業生を送り出すと、校務にも余裕が生まれ、土日のほか平日にも2日ほど休みを取り、青森まで出かけることにした。2004年の島根大会で同じA隊審査員でもあったよしみもあり、青森大会の総監督隊隊長であった俵谷先生に連絡を取ると、快く案内を引き受けて下さった。そうして片道1500kmを苦ともせず、（夏の青森大会の時もそうであったが）車で出かけて行った。1500kmは1日では着かないので、3 月中旬水曜日の夕方に広島を出発し、その日の晩は名神高速・多賀SAにて仮眠。翌木曜日の夕方に酢ヶ湯温泉に到着した。ニュースでは聞いていたが、5m の積雪にまず驚いた。俵谷先生が予約してくれていた酢ヶ湯の宿は実に心地良かった。「千人風呂」も申し分なかった。

翌金曜日、八甲田の1日目は「大岳環状コース」であった。前年の夏にインターハイで登った大岳ではあったが、雪の大岳とその周りの山々は全く別の世界であった。蔵王の紹介などでも目にする「モンスター」（雪を丸々被った樹木）が至るところに林立していた。大岳の南側から東側に回り込むようにして登り、小屋付近から頂上

に立ち、そうして最後は酢ヶ湯まで延々と続く白い大斜面を滑って行った。2 日とも宿に泊まるとお金もかかるので、その日の晩は 5m の積雪の一部が除雪されて駐車場になっている中に 2 人の車を並べ、その間にテントを張って眠った。これもまた快適であった。俵谷先生には青森の名産を色々とごちそうになった。駐車場の 5mの雪壁にトンネルが掘られ、宿の裏玄関へと近道で通じているのも面白かった。

翌土曜日の午前中は、ロープウェイを利用しての「銅像コース」の案内を俵谷先生にお願いした。土曜日ともあって、ガイドたちに案内されるツアー客で山は賑わっていた。ロープウェイで登れるこのコースは体力的には楽で、しかも長めの滑降コースが楽しめ、これまた言うことのないコースであった。昼に俵谷先生とお別れし、午後、その年のインターハイ新潟大会の会場地でもある神楽スキー場へと移動を開始した。八甲田からの帰りにまっすぐ帰るのももったいないと思い、実は翌日曜日の午前中にやはり新潟大会の山の一つである平標山を計画していたのだ。これは栃木の後藤さんと連絡を取り、落ち合うことにしていた。前日は気温が高めで、八甲田と比べて南の山では雨であったのか、平標山の雪は湿った腐れ雪という感じであったが、ともあれ 2 人で山頂に立ち、満足した。登りは尾根寄りにルートを取ったが、降りは思い切って 40 度くらいありそうなヤカイ沢の急斜面に飛び込んでみた。すると、湿雪と思っていた雪の層は 15cm ほどで、その下には固く締まった層があり、ターンをするたびに表面の湿雪が崩れ、10m ばかり雪に流されてしまいもした。幸い崩れる雪の量は大量ではなかったので、大事には至らなかったが、雪崩に関する一つの貴重な体験となった。

以上が「インターハイの山でのバックカントリー」第 1 回目で、続けてその年の GW には、愛知・岩狭さん、群馬・高橋先生をお誘いし、また広島からは元同僚の高田さんとともに、苗場山の手前になる神楽ヶ峰に登り、滑降した。バックカントリーの初級コースとしてよく紹介されているこのコースは、確かにお手頃なコースであった。そうしてその日の晩は、岩狭さん・高田さん共々、夏に総監督隊の宿舎の一つになる予定の和田小屋に宿泊した。

2013 年大分大会くじゅう山系、2014 年神奈川大会箱根山塊でのバックカントリーは、思わぬ積雪といったようなよほどの条件がない限りは難しいであろうが、2015 年滋賀大会高島トレイル・比良山系は、最初に述べたようにコース紹介の本がないわけでもなく、また近辺のスキー場の積雪からして、バックカントリーも不可能ではなかろうと思っていた。ただ、中部や東北のメジャーなエリアとは異なり、はたしてどの程度楽しめるだろうかとも思っていたが、近年私は中国山地のバックカントリーコースの開拓を一つの大きなテーマとしており、雪が比較的少ないと思われている中国山地でも意外と多くのバックカントリー適地が存在することに気づいてきた。したがって、滋賀県でも不可能ではないはずだ。そうして久々に「インターハイの山でのバックカントリー」第 3 回目をこの 3 月上旬に計画した。今回もまた私は 3 年担任で、3 月 1 日に卒業生を送り出した身だった。（さらに言えば、この 3 月末で、一応定年退職となる身でもある。）

なお、来年の岡山大会では蒜山（上～中および下～中）と朝鍋鷲ヶ山～金ヶ谷山～毛無山が使用されることになっているが、蒜山ではその一部を過去にトレースしたし、また朝鍋鷲ヶ山はこのたびの西地区研修会（2015 年 1 月）で、また、金ヶ谷山を含めてはこの 2 月に鳥取・冨永さんとトレースした。来年あたりは中蒜山も含めた三座縦走や毛無山にもトライしてみたいと思っている。